

学界の動向

日本看護研究学会 第21回北海道地方会学術集会を開催して

藤井 智子* 澤田 裕子**

去る平成23年6月4日(土)、看護学科棟大講義室において、日本看護研究学会第21回北海道地方会学術集会が開催された。北村久美子学術集会長(地域保健看護学教授)のもと「地域ではぐくむ看・看連携」をテーマに、シンポジウム「現実の課題から看・看連携の具体的な方法を模索しよう」、一般演題12題の発表があった。この学術集会は、地方会始まって以来初の札幌以外での開催であった。地方都市である旭川にどのくらいの人が集まってくれるのか気をもんだが、旭川らしい学会にしようと考え、旭岳の写真を取り入れた手づくりのポスターを作り、宣伝に努めた。その結果、旭川、富良野、名寄など道北を中心に、道央、札幌などからも看護職が集まり、また本学の学生も少数ながら参加し、合計105名で学術集会を盛り上げる事ができた。以下、その一部を報告する。



北村久美子大会長挨拶

1. 看・看連携とは?一顔のみえる関係の構築、とぎれることのない看護

少子高齢社会における日本では、病院から退院する患者様の多くは高齢者であり、病気が落ち着いても介護が必要であったり、医療依存度が高く複雑なケアを求められたりと、患者様やそのご家族は生活する上で多様な問題を持っているのが現状である。また、診療報酬改定において、クリティカルパスなどの地域連携(平成18年)、看護職がコーディネートする退院調整支援(平成20年)に続いて、平成22年度は「医療と看護の機能分化と連携の推進等を通して質が高く効率的な医療の提供」(訪問看護療養費引き上げ・がん患者等リハビリテーション料など)が改訂項目の一つとして打ち出された。これは、私たち看護職の役割拡大への期待の大きさの反映と思われる。そのような中で、人々が安心して生活していくためには、病院施設内の看護、施設外の看護と区切るのではなく必要な看護がとぎれることなく継続して提供されること、つまり看護と看護の連携、看・看連携が重要になってくる。しかし、看護職は患者様を通して、病院、地域、在宅というそれぞれのフィールドで「看護」を提供しているが、お互いの看護実践の実際、看護の悩みや課題を共有する機会は少ないのが現状である。これからは、病院、施設内と地域の看護職同士が関わりのある患者家族の入院前・中・後の生活上の情報、あるいは看護の目標を共有できる顔と顔のみえる関係を構築し、看護と看護の連携が容易になることが望まれる。

このようなことから患者家族のニーズに気づき、現実の課題からこの道北地域に根差した看・看連携の具

*旭川医科大学看護学科地域保健看護学 **看護部7階西ナーステーション

体的な方策を語り合い考える機会といたく今回のテーマを設定した。

2. シンポジウム

シンポジウムでは、本院 - 入退院センター担当辻崎ゆり子副看護部長が「入退院センターにおける看・看連携」、旭川厚生病院がん相談支援課主任小玉かおり氏が「地域と病院をつなぐ立場から がん相談支援センターにおける地域連携の実践とその効果」、訪問看護ステーションめぐみ所長の白瀬幸絵氏が「在宅療養を支える訪問看護から」という内容で発表した。

辻崎ゆり子副看護部長からは、08年4月から試行開始、09年12月に設置となった入退院センターの働きを報告し、入院決定時にすでに退院後の生活を予測した介入が始まっていることを再認識した。在院日数が短縮する中、医療の質を低下させないように、タイミングを逃すことなく、支援を次につないでいくことの大切さを実感した。

小玉氏は病院から地域、在宅へ戻られた患者様の様子を「フィードバック・カンファレンス」を通じて病院スタッフに伝えていると報告した。送り出した患者様がどのように生活し、どのように生を全うされたかを知ることは、関わった医師、看護師、関連職員それぞれにとって達成感や次への動機づけとなると感じられる発表、ディスカッションであった。また、道北地域の課題としてエリアが広く訪問診療が無い、24時間体制は難しいことが上げられ、そのような中でも患者様のニーズは変わらないこと、ニーズを支えるためにも地域全体で悩みを口に出していくことの大切さ



事務局オールスタッフ：
看護部と大学のコラボレーション

の提言があった。どこに住んでいても必要なサービスを国民は受けられるべきで、そのための努力を看護職は惜しまず住民への責任を果たすべきと感じた。

白瀬氏からは、医療依存度の高い療養者の質に考慮した、利用者を中心に目的志向型の支援と連携の実践報告がされた。紹介された小児の事例では、病院から在宅への移行において、単なる機器の準備だけではなく住宅の新・改築なども含めた療養環境の整備を考え1年以上も前から準備に取り掛かったという報告に驚き、「ないものは作る、ないシステムは作る」という言葉に大きな励ましを得た。

看護の送り手と受け手は、時に逆の立場となり得る。患者様を通して、病院、地域、在宅で「看護」が大きなサークルを描いてつながっていることを、顔と顔を合わせることによって実感する機会となった。

3. 一般演題の発表

一般演題は12題の応募があった。テーマとしては、退院調整部門における連携、地域連携クリティカルパス導入後の評価と課題、看護師が捉える退院支援の課題、退院支援における家族への看護、合同カンファレンスの成果と課題など、普段実践している看・看連携についていねいにまとめ、課題を整理しているものが多かった。まさに大会のテーマ、ねらいとしたことの実践を報告し合い深めた場面であったと考える。その他にも看護教育の実践などが報告された。

おわりに

今回のシンポジウム、一般演題の発表を通して、道北地域にはたくさん頑張っている看護職がいることがみえたように思う。また全道的に旭川のよさもPRで



シンポジストの方々、左から辻崎氏、児玉氏、白瀬氏。座長の藤井、澤田

きた。この話し合いが将来の看・看連携の発展に向けて発信の場になったと感じる。余談であるが、参加者からは看護学科棟大講義室の座席のユーカラ織についてすばらしいとの感想をいただいております、旭川のよさ

をここでも披露できたと感じる次第である。この学術集会の運営にご支援ご協力をいただきました本学関係者の皆さまに深く感謝申し上げます。